

第25回庭野平和賞贈呈理由

エル・ハッサン・ビン・タラール王子は、イスラエル・パレスチナ紛争との関わりを中心に、中東の地において、正義を伴った平和の構築にその生涯を捧げてきました。平和とは戦争のない状態ではなく、和解が達成されてこそ実現されるものであるとの考え方から、彼は世界中に広がる偏見や憎悪との闘いに重要な役割を果たしてきました。人間の尊厳に対する彼の理解を支え、インスピレーションを与えてくれるのは彼の信仰です。平和への献身は彼の人生を魂の旅に変えました。彼のすがたは他の人びとを啓発し、その足跡をたどろうとする同志を輩出しています。その声は信仰と理性の声であり、イスラームの教えと彼自身の知性に深く根差しています。彼の靈的・神学的な世界観は、他の宗教によって更にその豊かさを増しています。彼は政治や宗教によって隔絶された世界に橋を架け、あらゆる宗教における過激主義やテロに反対する活動を続けてきました。ユダヤ教やキリスト教やイスラームが持つ道徳的権威を、政治を超えた位置に高揚させるべく、彼は取り組んでいるのです。

庭野平和賞委員会は、宗教協力に向けられた彼の不断の情熱とともに、真実を語り、敏速に困難な問題に取り組む姿勢を高く評価しています。庭野平和賞委員会は、このたびの受賞者が平和を求めるイスラームの声を代表する世界的な人物であることを認識しています。彼は宗教間のより良い関係の構築に献身し、平和と調和に向けて情熱的かつ雄弁にその活動を続けています。彼の言説と行動のすべては、生命の尊厳に対する深い愛情の表明であり、その基盤にあるのは彼自身の信仰とともに、世界の宗教と人道主義の伝統が培った知恵に向けられた創造的かつオープンな姿勢です。

ハッサン王子は天賦のリーダーシップを具え、その才を人間が直面する幅広い緊急課題に対して十全に発揮してきました。平和活動に関わる数多くの諸宗教組織や団体で、彼はリーダーを務めてきました。1999年から2006年まで世界宗教者平和会議の実務議長を務め、またその後も名誉会長として組織を教導しています。

ハッサン王子は1947年3月20日、預言者ムハンマドの直系の子孫であるハシミテ家の一員として、ヨルダンのアンマンで生まれました。オックスフォードのクライストチャーチ・カレッジに学び、東洋学の学位を取得して卒業しました。

ハッサン王子は、彼の幅広い社会的関心を示す数多くの団体を創設し、その活動に積極的に関わってきました。それらの団体は、人類の進歩と人間の尊厳に資することを目的に活動を推進しています。「王立科学院」(1970)、「アラブ思想フォーラム」(1981)、「高等

科学技術会議」(1987)、「王立諸宗教研究所」、「イスラーム科学アカデミー」、「ハシミテ援助・救援局」、「外交研究所」、および「アラブ青年フォーラム」が彼の創設によるものです。

ハッサン王子はビジョンを行動に移す人物として、国際的にその名を知られ、人びとの尊敬を集めています。彼は国連による「新国際人道秩序」の創設を提唱し、それは後に「国際的人道問題に関する独立委員会」の設立として実現し、その報告書は第42回国連総会で採択されました。さらに「国際文化財団」、「文化の議会」、および「パートナーズ・イン・ヒューマニティーズ」も彼の創設によるものです。

ハッサン王子は、「ローマ・クラブ」会長、「大量破壊兵器委員会」理事、「核の脅威イニシアティブ」理事など、いくつかの国際委員会や国際団体の主要メンバーを務めています。また、「人種偏見、差別、外国人排斥、その他の関連する不寛容に反対する国連世界会議」に向けて、国連事務総長が任命した5人の地域専門家のひとりでもありました。

彼に授与された数多くの賞や栄誉の中には、環境保護に向け国境を超えた協力を提唱した彼の信念と、環境問題に対するホリスティックなアプローチに対し、国連環境計画(UNEP)から贈られた2007年度の「地球チャンピオン」の称号があります。

最近の活動として、ハッサン王子は各国の平和問題の専門家や活動家による諸活動を統合するためのグローバル・デモクラティック・レファレンダムの設立に向けて、著名人による委員会の議長を務めています。また、西アジア・北アフリカ地域の協力推進と安全保障を推進する「西アジアの声」計画にも着手しています。さらには、同地域における倫理規約の体系化を視野に、「社会憲章」の作成に向けた活動を率いています。その活動に関して、彼は次のように発言しています。「人間の尊厳や民主主義の欠如と闘うためには、政治や法律の境界を押し広げていくことが大きな活力になることを確証する必要があります。重要なのは、民族や国籍や宗教ではなく、市民であることこそが権利の基盤であることを認めないかぎり、社会憲章は何の意味も持たないということです。」

また、最近、ハッサン王子は「諸宗教・諸文化の研究および対話推進財団」の総裁就任を受諾しました。同財団の目的はアブラハムを父祖とする三大一神教、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラームによる最も重要かつ真正なメッセージを世に伝えることです。同財団のプロジェクトのひとつに、これらの宗教に共通する価値の分析的用語索引の出版がありますが、その目指すものはそれぞれの宗教の違いに敬意を払いながら、互いの共通点に更なる光をあてるにあります。

2008 年度の庭野平和賞受賞者であるハッサン王子には数多くの著書や論文があり、またメディアにしばしば登場するなど、さまざまな重要な問題に関する講演の依頼も多数にのぼります。彼には『エルサレムの研究 (1979)』『パレスチナの民族自決 (1981)』『平和を求めて (1984)』『アラブ社会のキリスト教 (1994)』『ムスリムであること (2001)』『継続、革新、変化 (2001)』『ファイサル一世を偲んで：イラクの問い (2003)』などの著作があります。

中東の地においては、人びとの真摯な願いや希望が効率的に仲介されるような市民社会や政府の構造を作り上げていくことが重要であると、ハッサン王子は力強く主張しています。彼は相互の平和努力と地域の協力により、イスラエル・パレスチナ紛争が終結に向かうことへの希望を語るとともに、この地域における紛争の根本原因のひとつである貧困の問題と取り組むために、中東版「マーシャルプラン」創設の議論を展開しています。

ハッサン王子が発する声は、信仰に支えられた理性の声です。宗教は本来退行的で脅迫的な勢力であると考えている世俗主義者にとって、それはひとつの挑戦です。一方で、社会の現代化に対する彼のオープンな態度や、民主主義や広範な人権擁護の主張は、原理主義者にとっても大きな挑戦であると言えます。

エル・ハッサン・ビン・タラール王子に対して第25回庭野平和賞を贈呈するにあたり、庭野平和賞委員会は、純粹な信仰をその支えとし、平和と正義に向けて地球規模の取り組みに邁進する類いまれなリーダーに対し、心より賞賛の意を表すと共に、ハッサン王子の功績を広く世界に知らしめることにより、多くの人々を啓発し、平和に貢献する同志の輩出につながることを切望いたします。